

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

東スニトの社会変容： 生活に関する聞き取り調査の活用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 娜仁格日勒 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00005977

東スニトの社会変容 — 生活に関する聞き取り調査の活用

娜仁格日勒

内モンゴル大学・国立民族学博物館外国人研究員

- | | |
|------------------------|-----------------------------|
| 1 はじめに | 2.3 生業と生活 |
| 2 梅棹調査資料に見る1940年代の東スニト | 2.3.1 交換の未発達な社会 |
| 2.1 生態環境 | 2.3.2 日常の衣食住 |
| 2.1.1 自由移動の遊牧 | 3 21世紀初頭の東スニト |
| 2.1.2 5種の家畜を持ち揃える | 3.1 サイハントヤー：「三害」に悩まされる牧人 |
| 2.1.3 オオユキとオオカミ：大自然の風景 | 3.2 イラルトの語り：増えつつある牧人に変身した漢人 |
| 2.2 人口の民族構成 | 3.3 チョグジャラガルら：厳しい制約のなかでの牧畜 |
| 2.2.1 1940年代の人口状況 | 4 おわりに |
| 2.2.2 東スニトに流入した漢人 | |
| 2.2.3 人口の民族構成の変動 | |

1 はじめに

梅棹の調査資料は「梅棹アーカイブズ」とよばれている。そのうち、もっとも大きなまとまりは1944年から45年にかけて内モンゴル自治区で調査研究がおこなわれたときの資料である。調査の梗概については、『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』（小長谷編 2011）に示されている。

学界では、梅棹の本格的な学術探検は、1944年からの内モンゴル牧畜民の調査で実践されているとみている。東スニト¹⁾はまさに梅棹探検の重点地域である。滞在期間の長さ、調査の範囲、そして詳細程度のいずれにしても、東スニト旗に関する内容は梅棹モンゴル調査資料のなかでもっとも重要な位置を占めているに違いない。

さらに、調査時期もモンゴルの真冬であり、それまでの日本人のモンゴル高原調査は夏の場合が多かったのと違っている。冬を知らなければモンゴル高原を知ったことになりかねない。ときには気温が零下40度まで下がる冬のモンゴル高原を国境付近まで進んだ。その途中、梅棹は遊牧民の天幕を訪ねて調査をおこなった。

しかし、東スニトは現代的变化が著しい地域でもある。この移り変わりを筆者の実地調査資料のなかで詳細に記述する。したがって、本稿は梅棹の東スニトに関する資料を文献史料として扱い、梅棹アーカイブズの貴重性を強調すると同時に、筆者が当該地域で得た実態調査資料と照らし合わせ、社会変容の解明を目的とする。

梅棹の内モンゴル調査資料はフィールド・ノート、ローマ字カード、牧畜論草稿、写

真、スケッチなどから構成されている。本稿では主としてフィールド・ノートを用い、これをノートと略称し、前に冠すべき「梅棹資料」という逐一の標記は省略する。ノート番号と頁数はアラビア数字で表記し、例えば、3-8はノート3の8頁を表す。筆者自らの調査資料は「N調査」と表現する。

Index Noteによると、梅棹の調査隊は1944年9月25日にシリーンゴル盟南部の肅親王北牧場で調査をおこない、東スニト旗の地では10月3日の楡木入りから12月19日のザリン・スム滞在まで、約2ヶ月半に亘って調査を実施した。翌20日に、一行は西スニトのチャプチルに入って行く。調査の詳細はとりわけノートのⅡ～Ⅷのなかで忠実に記録されている。彼らは、旅の途中で、たくさんのモンゴル牧民のアイル＝家を訪問しては、遊牧移動の実態についてたずねた。インフォーマントの数は224人にのぼり、アイル調査Indexでは35番～258番までがそれである。聞き取りの内容は生産生活のあるゆる面を網羅し、なかでも、家族構成、家庭財産、消費の品目と数量、衣食住、家畜所有数と種類及び増減、売買、年間移動の回数と場所、草ばえなど牧野状況、家畜の被害と越冬、各種畜産品の加工、家畜の管理、人力の賃金、政府の供出と税金、宗教、教育、健康状況、衛生観念、匪賊や治安などがすべての調査対象に対しておこなわれた。

これらの内容のなかで、本稿は生態環境、人口の民族構成、生業と生活に関する部分をまとめたうえで、筆者の現地調査と照合し、東スニトの自然と社会がこの半世紀で生じた変遷を把握する。

2 梅棹調査資料に見る1940年代の東スニト

以下、梅棹資料に基づいて、1940年代の東スニトの自然・社会の基本的な概況を再現する。当時のモンゴルの草原、自然としての草原は如何なるものであったのか。いいかえれば、自然に法則と秩序があると考えた場合に、人々は如何なる法則にしたがひ、如何なる秩序を維持していたかを考える。結論を先に示しておくが、当時のモンゴル人の生産生活は自然の豊富な草原に適応した遊牧であり、家畜への価値の附加、あるいは利用度の増大が認められない状態であった。モンゴル人はもっぱら古来の遊牧に専心していた。

2.1 生態環境

調査から40年以上経過しても、梅棹は昔のスニト草原の風景を鮮明に記憶し、「スニトの南部は草ばえもよく、丈のたかい草が風にそよいでいた。まさに金波銀波であった。……。東スニト平原の南部にはいくつもの湖があった。湖にはわたり鳥がきていた。」(梅棹 1990 : 36 ; 38) と回顧している。果てしなく草の海であったことが読者にはっきりと伝わってくる。では、梅棹資料に当時の東スニトの生態環境が具体的にどのように描

かれているのか。

2.1.1 自由移動の遊牧

調査隊が東スニトを南から北へと通っていく初めに、秋営地にいる牧民は多かったが、これから冬営地へ移動する予定であった。移動の時間、方向や場所にはおおむねの法則はあるものの、絶対というわけではない。その遊牧民は年間に数回移動し、大抵が四季の移動先たる春夏秋冬の宿営地を所有していた。中央ユーラシアのほかの遊牧民と同じように、年間移動の精確な回数と場所は最初からまったく決まったことではなく、気候などによって変わる。遊牧とはまさに移動によって土地利用の高度化をはかるものである。

今西も「この中間草原より北へ行くと、年に四回ないし五回移動するというものも多くなったが、モンゴル人民共和国との国境までのあいだで、七回も移動するという牧民もいたようである。」(今西 1948:70-71)と回想している。梅棹は後にも遊牧民は「多いのは年に十数回、二十回と動く。」(藍野 2011:176-177)と強調する。

本来なら、移動回数は地域に応じて多少異なるが、「いつもは年に4回移動する。ことしは人手がなくて2回になった。」(7-29)のように人手などの制約があったとしても、季節の変化に従ってその意志さえあれば基本的に自由に動いていたに違いない。「すみたいと思う人があれば、いくらでもこのail群には入って来てもよい。」(5-68)。どこでも誰がいつ引っ越してきてもいい。

移動先の場所は早からの決定ではなく、直前にラマに相談するかまたは遊牧民が自ら決める。「今年の冬営地はどこへゆくかわからない。ラマに相談してきめてもらう」(5-88~89)。これと同時に、「場所を決めるのは物をつみこんでしまって歩きながら草を見てきめる。」(8-39)というもある。いずれの場合も、だれでも自由に移る空間があったからこそ可能である。

そのような自由放牧ができる遊牧民の家畜群に牧夫がついていない場合も多くあった。ヒツジ群が方向を迷い、まいごになる恐れがあるため人がつくが、とりわけ、水草が十分な夏や秋では、他の家畜群に番人がつかないのが一般的であった。

東スニトの中間以北はタムチン・タラという平坦地にある。調査隊がおった当時はタムチン・タラがほぼ無住地帯に近い状態であった。調査隊は相当な距離を置いて、寺院など固定的な施設に出会っていた。寺院の周辺に遊牧民のアイルが散在していた。ただし、普通の遊牧民の家族が、いくアイルか一つのところに集まってホト・アイル²⁾を構成し、見たところでは村落とか部落とか呼びたくなるような場合でも、固定生活者におけるような持続的なものではない。彼らは、「もしailにゆきあたれば、そこに腰をすえてもよいし、ゆきあたらねば、一軒だけで居をかまえてもよい。」(8-42)のように、たまたまその季節に、それだけの家族がそこで落ち合ったというだけで、次の季節には

またおたがいに、どこで誰の家族と落ち合うのかまったく分らないという、一時的浮動的な結合である場合が多い。「別に近所の ail に相談もしない。ここに勝手にいすわることにきめた。蒙古の土地だ。何も近所の ail の土地ではない。」(6-68)。古来より、モンゴル人に土地占用の意識はなかった。

そもそも、牧畜の一形態としての遊牧とは、家畜を放牧しながら、牧畜生活者が、家財道具のみならず、天幕もすっかり持ち運んで、ある地域内を移動して歩き、移転をつづけてゆくことである。この意味では、現今の内モンゴルで牧畜が一番多く残っているとされる東スニトにおいても遊牧は見えなくなり、ここも定住牧畜や半移動牧畜に変わっている。定住牧畜は1ヶ所で限られた狭小な空間に放牧をおこない、固定建築に住む人が多い。これには夏冬の移動すらない。半移動牧畜には年間2回、すなわち夏冬の移動はあるものの、移動先のいわゆる夏营地と定住先の冬营地との間はそう遠くない。移動先に家畜とともに、天幕と必須だけの家財道具を運び込み、そこで一定期間の放牧をする。借りりの牧場が春夏の移動先となり、春夏营地の役割を演じているのが一般的である。固定建築の家屋と移動式天幕のゲルとの両方が設けられた定住先は冬营地になっている。N調査対象のサイハントヤー、ゲレルバートルらは移動せずの定牧であり、チヨグジャラガル、スチンバトらは半移動牧畜である。梅棹調査時代の東スニトに固定家屋がほとんど見られなく、遊牧民はかならずゲルに住んでいた。今日、この草原にちらほらと白い天幕が点在するが、限られた放牧を営む牧人の家か、観光地のどちらかである。

梅棹調査の時代に、モンゴル人遊牧民の年間移動回数について日本人の調査報告書類のなかで多く議論されていたが、モンゴル人遊牧民たちが年間において、いったい何回移動していたかはともかくとして、確実に言えるのは、彼らは豊かな自然が保たれた草原でほとんど何の束縛を受けずに、自由に移動放牧していたことである。

2.1.2 5種の家畜を持ち揃える

梅棹調査隊一行はグンシャングダグ砂丘を越えるのに、2週間以上も費やした。乗馬で家ごとに聞き込みをし、ゆっくりした滞在調査であったため、そこにはモンゴル人の生活の生々しい息吹きが反映され、暮らしのあらゆる面が記録されている。家畜の機能については、「蒙古人の生活にとって、牛が中心家畜となっていることは、疑う余地がないのである。とくにこの頃のように、粟や麵の入手が困難になると、彼らの自活上、乳製品の重要性が著しく高められてくる。」(今西 1948: 152)と指摘されている。一方、ヒツジはウシと同様に、5種類の家畜のなかでもっとも重要な役割を担い、その数も多い。興蒙委員会実業処が1943年に実施した調査の結果は「蒙古自治邦政府管内家畜頭数表」として表されている。ヒツジはもっとも多く、東スニトのそれが西ウジュムチンに次いで2番多く、20万頭を越えていたようである(29-53: 39-4)。

5種の家畜は各自独特の機能を有する。何か1種類だけがあるよりも、複数の種類を維持することによって、一層多角的な利用が広がる。ヒツジ、ウシのほかに、どの家でもウマもヤギもラクダもごく普通に放牧されていた。

ところが、現在の東スニトでは「南牛北羊」と称し、南部はウシが、北部はヒツジが中心家畜になっている。商品としての価値が求められていることも当然あるが、根本は政府の制限であり、ウシかヒツジのいずれの飼育のみが許される。本来のモンゴルの遊牧とは、草が悪くなった理由によるものか、あるいは原始的な、純粋な放牧時代の遺風を、ただ習慣的・慣性的にうけついでいるだけ（梅棹 1990：133-134）なのかは別にして、複合的な家畜の構成が維持され、5種類の家畜をすべて同時に所有し、水草を求めて移動できたことは確固たる事実である。

2.1.3 オオユキとオオカミ：大自然の風景

冬の東スニト草原は雪害に見舞われることが多くあった。雪は土地をうるおしてくれるが、時には、遊牧民に大きな被害を与えることでもあった。ノートのなかに雪害の記述も多く見られ、雪害は遊牧民が遠くへ引越す原因の一つにもなる。雪害には、避難が一番というわけである。所与の自然環境に適応した生活を確立するうえで、移動はきわめて重要な役割をになっていた。

他方では、こういった雪害などに備えて、地方政府に対する援助の形で日本側は近代的な対策を講じた³⁾。雪害時に、重要なのは乾草の供給であると認識し、品種改良とともに乾草増産も関係者に重要視されていた。

狼害も彼らの聞き込み調査の重要な項目であった。狼害に遭遇した記述の例を挙げてみる。Shagdur taijiはヒツジ600頭、ヤギ70頭、ウシ44頭、ウマ20匹、ラクダ10匹を所有するが、そのなか、ヒツジ30-40頭、ウシ2頭、ラクダ2匹が狼害に遭った。オオカミによる家畜の年間総被害数は40頭以上にのぼる（9-35）。小型家畜だけではなく、大型家畜も被害に遭う（8-20）。オオカミが多い原因は、「去年の冬営地は、わるいところだと思っている。オオカミがたくさんいる。」（5-89）のように、移動先の場所が悪いからだと考える牧民もいた。

オオカミによる被害は深刻であったが、遊牧民たちはだからといってオオカミが消滅してしまうような行動をとっていない。モンゴル人にとって、家畜のみならず、動物全体が自然として彼らに与えられたものである。彼らはオオカミを壊滅させる方法も手段も考えなかった。放置しているわけではない。ここにも遊牧民の自然に順応する生き方と態度がうかがわれる。彼らはヒツジ以外の家畜がオオカミに対抗できる力を備えると考えていた。オオカミより、人間による被害が深刻であった。

狼害も雪害も草原にもともと当然にあるべき、あって少しもおかしくない現象である。生態環境の正常性のしるしであるとも受け止めたい。ただ、今の東スニトでは、雪害が

数年おきの間隔でまだ続いているものの、空間がないゆえ、雪害時の避難行が困難になった。オオカミがみごとに姿を消し、狼害の心配は完全になくなっている。狼害のかわりに、サイハントヤー一家の遭遇は過去にはなかった炭鉱汚染、ビニールと犬による被害を伝えてくれる。

梅棹資料によると、オオカミのほか、モンゴルガゼルもキツネもギリスもたくさんいた。Batomongkはひとりで火縄銃とナワを使って、多い年には100頭以上のモンゴルガゼルと、キツネとギリスを各7～8頭、オオカミを1～2頭、捕えていた(7-20)。

要するに、1940年代の東スニトは草原が豊かで、水源もすぐ近くに見つけられ、人々が5種の家畜に依存して生活する遊牧地域であった。ほかの調査でもこれを裏付ける記載がたくさんあり、東スニトも含まれた内モンゴルは日本に原材料を提供できる羊毛の重要な生産地としても期待されていた⁴⁾。

ここでいう豊かな草原はただ面積の広大さを意味するのみならず、草の種類豊富さも指している。自然が自然のままに残っていた時代であったため、草原の植物は実に多種多様であった。牧畜論草稿「内モンゴル調査 Katiku no Ieほか パラ資料」の第61～65頁に牧草の名称が列挙されている。日本側のほかの様々な踏査記録にも類似の内容が多く見られる。『北支』1940年第11号に「蒙古の野生麻が混紡用繊維」と題して、モンゴル地方の「麻は野生のもので牛馬や羊の飼料にも向かず古来のこの地方の廣漠とした野原に自生繁茂し、誰一人として顧みる者がなかったものである」と述べ、さらに野生麻の利用開発を呼びかける。人煙まれな大草原に麻その他の植物が爛漫に茂っていた。

2.2 人口の民族構成

梅棹調査の一目的は人口の実態把握である。半世紀以上経って、東スニトの人口の状況が、とくに民族構成がどのように変化しているのか。

2.2.1 1940年代の人口状況

梅棹資料のなかで、1940年代の東スニトの総人口数および民族構成に関する記録が残されており、とくに被調査世帯ごとに家族の構成が詳細に記されている。全体の把握としては東スニトにおける人口調査の結果がノートに写され、モンゴル人と漢人がそれぞれ7,081人と224人であった(29-42)。当調査は1943年に総務庁企劃科がおこなったものであり、極秘とするされている。ちなみに、この調査では、各地に滞在する日本人の数も明記されている。

さらに、駐蒙軍司令部調査班の調査によると、東スニト旗の面積は35317.50平方キロメートルであった(30-21)。したがって、1943年の時点では、人口密度は約0.19人/平方キロメートルであったことがわかる。

梅棹資料にはモンゴル人の人口減退傾向⁵⁾、漢人の進入(43-5～33, 43-40～46)およ

びそのもたらした問題など（43-50～80）が論じられている。

そのとき、モンゴル人の人口数は少なく、当局者や関係者らに問題視されていた。「蒙疆の人口七百萬そのうち蒙古人は僅か三十萬、他は殆どすべて漢民族である」との指摘がある（『北支』、1939年第11号）。1942年4月発行の『蒙古』には満洲「国内百十萬の蒙系国民」と記している。その他の関連資料も参考にして、1940年代前半の内モンゴルのモンゴル人人口がおよそ140-150万人であったと推測できる。「蒙疆の人口七百萬」のうち30万がモンゴル人という具合にしてみても漢人は圧倒的に多いが、ひいては満洲国領内の内モンゴル東部では漢人人口がさらに多数を占め、内モンゴル全体にさまざまな問題を来したに違いない。ノート42～45などではシリーンゴル南部で漢人の流入が引き起こした各種の社会問題について述べ、とりわけ牧場の縮小と農耕の推進、治安の悪化、地域内の非正常な移動などに注目した。

2.2.2 東スニトに流入した漢人

東スニト草原の奥地にも漢人は入っていたのであり、彼らは主にフェルト屋、羊毛の刈り取り、革なめし、ヒツジ飼い、売買などをしていた。

梅棹が「家は蒙古人と漢人とで地域的に分けている。」（43-37）と分析しているように、シリーンゴルの南部では農民として移入してきた漢人はすでに多くいたわけだが、モンゴル人と漢人はまだ棲み分けしていた。漢人は主として畑づくり、農耕を営んでいた。東スニトの北部でも定着したフィルト屋や使用人としての羊飼いなどの漢人たちは見られた。しかし、N調査で明らかになっているように、今日では、当初から牧畜を目的として東スニト草原の北部奥地までに入植し住みついた漢人が相当増えた。これはイラルトの話からも分かるが、調査の途中に出会った漢人が予想以上に多かったことは非常に衝撃的であった。さらに、N調査のなかでもう一つ判明したのは、漢人が牧場と家畜群を所有し、あたかも原住民であるかのように牧人と化しているのと対照的に、羊飼いなどの使用人はほぼ全員がモンゴル人であり、漢人がいなかったことである。

前述の政府総務庁企劃科が実施した調査のほかに、蒙古連合自治政府も精確な人口調査を行った⁶⁾。そのときも流動人口は存在していたと考えられるが、交通の発達程度などを考慮して、現在に比すると、さほど多くなかった。したがって、上述のデータは当時の人口実情に極めて近いと考えてよい。ところが、現在は東スニトも含めた内モンゴル各地における流動人口の確たる実情の精細な把握は至難である。

2.2.3 人口の民族構成の変動

流動人口が大幅に増加しつつあるものの、民族構成のおおむねの事情は把握できる。梅棹調査時代から今日に至る期間中のモンゴル人と漢人の人口の変化を梅棹資料及びその他の関係資料に基づいて分析する（表1）。

表1 1943年から2010年における東スニットの人口の民族構成

年 代	1943年	1956年	1964年	1982年	1990年	1999年	2010年
総人口	7,336人	7,166人	13,829人	27,206人	30,524人	32,143人	33,652人
人口密度（人／平方キロメートル）	0.19	0.20	0.40	0.77	0.89	0.94	0.99
モンゴル人人口／ 総人口における比例	7,081／ 96.93%	6,366／ 88.83%	9,860／ 71.34%	15,771／ 57.97%	18,527／ 60.70%	19,607／ 60.82%	19,527／ 58.02%
漢人人口／ 総人口における比例	224／ 3.07%	777／ 10.84%	3,894／ 28.16%	11,268／ 41.42%	11,809／ 38.69%	12,303／ 38.58%	13,929／ 41.39%

表はノート29、Sudba 2006：付録、蘇尼特左旗地方志編纂委員会2004：pp.139～146、内蒙古自治区第六次全国人口普查領導小組弁公室・内蒙古自治区統計局 2012をもとに筆者が作成した。

旗誌や人口調査の数字は地方政府が各下位行政機関の報告データに基づいて作成される官製のものであり、公的な資料である。事実上、行政機関の統計では捉えられない情報や上達文書に反映されがたい状況は多々ある。例えば、戸籍上にモンゴル人と名乗っているにもかかわらず、実際は漢民族である人は相当の数にのぼる。また、流動人口は一段と激烈にふえたのが1990年代初めごろからであり、その数の精緻な把握は難しい。これらの実情を考慮すると、とりわけ1990年以降のデータは慎重に扱う必要がある。

仮に、上述の統計が正確なものであるとする。モンゴル人の人口は1943年と2010年にそれぞれ7,081人と19,527人であり、増加の度合いが3倍にも達していない。一方では、漢人の人口は224人であったのが60倍以上も増えて13,929人となっている。人口の自然増殖ではなく、漢人の入植によって急速に増えたことは自明である。

人口密度は1943年に比べると、2010年にその5倍以上になっている。梅棹調査時代には1人の牧人が使っていた牧草地を、今では5人が使う、と理解できよう。土地の負担が非常に重くなる。これだけではない。地下資源の大量な開発などにも多大な土地の占用が強いられている。幾重にもわたる草原に対する消耗である。

モンゴル人と漢人の総人口における割合は1943年にそれぞれ96.93%と3.07%であったのが2010年に58.02%と41.39%と変わっている。仮に、戸籍上にモンゴル人と登録している人たちが事実上もモンゴル人だとしても、総人口におけるモンゴル人と漢人の割合には異常な変化が起こった。前者が低下し、後者が十数倍に増加した。

梅棹調査時代に問題視されていた人口数は増えたものの、モンゴル人の占める割合は大幅に落ちた。人口密度、モンゴル人と漢人の人口総数の増加度合、旗の総人口におけるそれぞれの比例の変化などいずれを見てもわかるように、1940年代以来の人口の変化はアンバランスな状態にある。いまの東スニットの直面している深刻な問題は人口の急増のほかに、環境の破壊、遊牧の喪失など実に多面にわたって存在していることが、後述のN調査のなかで明らかになる。

2.3 生業と生活

一般にモンゴルの遊牧とは、季節的移動を必要とする牧畜を意味している。生まれつきに移動性を有するヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどの家畜の生み出す恵みに依存して、基本的な生活が維持できる。遊牧は生業様式であり、生活様式でもある。「蒙古人の生活は通常いわれるがごとき自給自足生活ではまったくない。かれらは牧畜業を専業としているのである！その意味において、漢人の農民の無理な自給生活よりもはるかに高度の経済段階にある！」と梅棹は高く評価している（47-Ⅲ-21-2-6）。まさに指摘のとおり、本来のモンゴル人は5種の家畜に頼って、生活需要を十分に満たすことができるのであった。

農耕は自然を変えて、別の自然を作るものであるが、一方、遊牧は自然と相互に影響し合いながら自然に適応して、自然のなかで生活する。遊牧こそほんとうの意味で自然のなかに生きる暮らしである。梅棹調査時代の東スニトの遊牧民たちはこのような日々を過ごしていた。暮らしに何の不自由しないでもないが、一番の基底たる遊牧は完全にできた。ここでは、次の2点に絞って述べていきたい。まず、遊牧で生活が維持され、商品の流通が発達していなかったことについてまとめ、次に、日常の衣食住の様子について整理する。

2.3.1 交換の未発達な社会

遊牧民の買い物を含めた生活ぶりが詳しく観察されている。東スニトには商品の流通はなかったわけではないが、物品の品種も数量も少なく、さほど繁栄しなかった。貨幣の使用が少量であり、物々交換がより多かった。もっとも主要な財産たる家畜、それに毛皮等の副産物は自家消費以外に、取引先の店舗の大蒙公司やホリシヤ、漢人商人のマイマイに売ってその代金で日常必需品を買っていた。買い物の主要内容は茶、麵、粟、綿布、たばこであり、その量も決して大した数ではない。畜産品の加工というと、乳製品とフェルトづくりの程度であり、それも自家消費にとどまる。

このような東スニトの遊牧民には伝統がより多く守られ、古来に対する彼らの執着心が著しかった。かの遊牧民にとっての家畜は、家畜といっても自然として与えられた家畜であり、彼らは家畜への価値の附加や利用度の増大をそれほど求めない。家畜の自然生活に対する尊重こそ彼らの伝統である。多くの制約を受けながらも、在来種に執着をいただき、伝統的な牧畜を今なお最大限に堅持する東スニトの牧人にはこの特質が今なお認められる。

しかし同時に、1940年代のシリーンゴルでは越冬乾草の大量貯蔵および産量増大を目指すヒツジの品種改良を政府と日本側が推進していた。ただ、これは遊牧民によって行われたものではない。

日本によるモンゴルヒツジの品種改良の経緯について言及しておく、最初は1935年

に善隣協会がアバガ旗に牧場をもち、綿羊改良所を開設したことから始めて、4年後にメリノ種と在来種との雑種を一千頭産んだことであり、その後の1939年9月に政府が綿羊改良所を接収、シリーンゴル盟牧場として、新たにニュージーランドでつくられた毛肉兼用の品種コルデル種に置き換えた。これ以外に民間団体においても各種事業を進め、蒙古綿羊協会が創設され、政府と民間が協力してコルデル種を推進するようになった（善隣協会 1943年12月号：128；1944年1月号：99）。他方では、東スニトの遊牧民が放牧していた家畜は在来種であり、品種改良の話はまだその原野までには行き渡っていなかった。

家畜の増産や品種改良等が盛んに喧伝されていたのに対して、梅棹は次第に批判的になり、「自然に適応したかたちを、どうして変えられますか。モンゴルの遊牧は、あれはあれで立派な仕組みをもっているんです。」（藍野 2011：177）と、モンゴルの伝統的な遊牧への高い評価を変えることはなかった。

遊牧民は累積的に蓄える物質的な富に無関心である。東スニトの遊牧民は乾草も必要以上に刈り貯めることは絶対しなかった。乾草を冬季に最低限の必要な量だけ刈り取り、それ以上は刈らない。刈り取れる草はいくらでもあったが、大量に貯蔵する慣習はなかった。それにとまなう乾草の売買も行われていなかった。

もう一つ加えておきたいのは、家畜の病気である。商品交換の不活発も一原因となり、近代的な獣医師と医薬品が比較的乏しかったのであり、家畜の病害が時には大きなものであった。ノートの記載には、ほぼすべての家庭が家畜の病害に遭っていたことがうかがえる。この状況に即し、日本の援助を得て、蒙古連合自治政府が家畜防疫隊を派遣し、予防や治療に努め、効果をあげていたようである（善隣協会 1941年9月号：138）。ところが、発展を成し遂げているはずの今日の東スニトにおいても家畜の病気は未だに牧民たちを悩ませている。

2.3.2 日常の衣食住

1940年代の東スニトの衣食住には、形態や趣向の変化が多少みてとれたが、遊牧的な特徴がほぼ完全に保たれていた。

衣は一般の遊牧民が在来の装いをしていた。その生地には綿布が用いられながらも、冬物が家畜の毛や皮で賄っていた。すなわち、家畜をほふったときに副産物として生じる毛皮は、温かい衣料を提供してくれる。「毛皮の上衣は妻がつくった。」(2-21)のように、自ら服を縫う。服装についての詳細な描写は梅棹のスケッチを参照されたい（小長谷，堀田 2013：28-36）。

粟や麺類も配給されていたが、遊牧民の飲食は基本的にウシとヒツジに依存して、夏には乳製品が、冬には肉が中心であった。「夏は乳をのむ。パイメン⁷⁾はない。ユーメンも同じ。あったら少したべる。……。なかったら仕方がない。」(4-44)。小麦粉などの穀

物類が入手できないときにも、乳製品や肉で豊かな生活を保持した。「ことしは粟、白麵がないので、ヒツジをたくさんころした。その数はわからない。冬のためにたくさん一度にころす。10月-11月頃。……。ころすときはやはり冬である。」(8-20) という具合である。

食べものと関連する仕事には家畜の屠殺を男がおこない、乳搾りと乳製品づくりが主として女性の分業であった。乳搾りは一般に初夏から秋にかけて行われ、出産した母畜に限る。乳を搾るためには、まず子畜による吸い出しが必要である。搾乳後の残り乳も子畜の哺乳にまわす。乳搾りで取れる乳の量は個体によって若干異なるが、多量ではない。ノートに乳搾りの量が書きしるされているように、1日に1~2回搾って、適量である。さらに、「家畜は朝はかってに出てゆき、夕方は人が探しに行く。探しに行く人は誰でもよい。牛がかえってくると乳を搾る。……。かえって来なかったらしほらぬ。」(2-29)。いかにも牧歌的な生活形態である。

今では乳量増大をめざして、ウシは機械のように扱われている。すべての乳牛が年間を通して乳搾りができ、1日4回搾り、1回は5斤=2500グラムと決まっている(写真1)。

また、人と家畜のどちらにも欠かせない水源は求めやすかった。川や湖が多く散在し、それを人間も動物も飲用していた。「家畜はサイン・ホープルの水をのます。……。もし、サイン・ホープルの水を、ほかの人がやってきてどンドンつかってもそれはかまわない。それは大地から出てくる水である。」(6-70) と遊牧民が語る。現在は、自然の河川水は皆無に近く、みな自家で機井と呼ばれる電気ポンプ式の井戸を掘っている。自力で井戸作りができないか地下水が出なくなっている場合は、牧民ゲレルバートルのよう



写真1 乳搾りにも機械が導入され、乳搾りの量が増大している。

に、遠くから水を運ぶ。

住居は移動式の天幕たるゲルがほとんどであった。ゲルの材料はフェルトと木材である。家畜の毛さえあれば、住まいの作りには問題ない。そのとき、シリーンゴルの南部には固定家屋に住む人も多く見うけられたが、東スニトには非常に稀であった。

日常の衣食住は簡素であったが、畜産品で十分賄い、自給自足ができていた。ところが同時に、時代背景はモンゴル人の生活にも影を落としていた。以前、不自由が感じられなかった品物であっても、今では入手が困難になった。戦争のため、物資とくに食糧の不足がすべての調査対象に確認できる。政府の物資統制は東スニトの遊牧民の日常生活にも直ちに影響を及ぼし、反映された。「ホリシヤは前、出きた当時は物を買ったが、いまは買うにも物がないので、何も買わない。売買人はまわってこない。何もものがないので、来ないとこまる。来た方がよい。」(6-49)と品物を期待している。ほかの家でも状況が同じであり、Shamjidomjiは「冬は一つのailに30斤のバイメンをくれた。秋はこまらない。昔は200斤くらい。一つのailで使った(冬と春)。7、8年前からこんなに少なくなった。」(5-23)と述べる。

さらに、戦争の苛烈凄惨が増してくるにつれて、物資統制を一段と強め、一元的に統制するため、元来、東スニト地域で活動していたホリシヤと大蒙公司、蒙疆畜産股份有限公司、漢人業者および日系商社を統合して、1943年10月に設立したのは蒙古皮毛公司である(善隣協会 1944年1月号:83)。すなわち、すべての取引を当局者が支配下に置いたのである。

3 21世紀初頭の東スニト

梅棹調査時代の東スニトはまぎれもなく遊牧であったが、今では定住牧畜と半移動牧畜となっているため、現在に関しては、本来の遊牧と区別できるように「牧畜」と表現する。

本節では、筆者の行った実地調査を踏まえ、東スニトにおける生態環境、人口の民族構成と生業生活の実態に目を向ける。そのうえ、これを通して、さらに内モンゴル全体の現代像を映し出すことを図りたい。

調査は2013年6月16日～23日、10月3日～9日、2014年3月20～24日にかけて、3度にわたって実施した。

2013年の調査時点では、東スニトは面積33,469平方キロメートルの広さと約3万4千人の人口を有し、内モンゴル自治区においても人口の少ない地域であり、牧畜を主としている。旗政府の所在地はマンガラトと言う名の小さな町であり、在住人口の60%が漢人である。

東スニトにおいても、近代的な設備の導入の試みは一部では見られ(写真2)、家畜の



写真2 飼料と乾草が与えられる牛舎

頭数の増加は事実である。その一方では、かの地も遊牧文明が失われ、人口急増、環境破壊、生態移民にともなって生じた深刻な社会問題に陥っている。調査の過程で現場の変貌を痛感しながら、もっとも心を打たれたのは、とうぜん牧畜の生態的な適地という理由もあるわけであるが、社会主義の革命と改造の洗礼を受けて、21世紀に入ってなお、苦しい状況のなかで牧民たちがかろうじて遊牧の伝統を保つ努力を続けていることであった。

与えられた紙幅に応じて、調査で得た典型的なインタビューを選出した。東スニトの現状をありのままに再現するため、インフォーマントごとのインタビュー内容の分類は省くが、下記の順に生態環境、人口の民族構成、生業生活がそれぞれのメインになると考える。

3.1 サイハントヤー：「三害」に悩まされる牧人

マンガラトの町から西北へ車で草原の道を約30分走ると、ダルハンウーラ・ソムのバヤンマンライ・ガチャーの牧民サイハントヤーの家に着く。ここは大手企業大唐鼎旺褐煤深加工産業園という石炭開発会社と隣接している（写真3）。石炭の掘削を行う子会社はマンライ（芒来）鉱業である（写真4）。正確にはむしろサイハントヤーの住居と牧場が産業園に包囲されていると表現したほうが事実にもっと近い。特に、牧場の北部は産業園の加工場との間を1本の有刺鉄線で境を設ける。サイハントヤーは女性で、1958年生まれ、安徽省出身の孤児である。記憶していないが、生後数か月のときに安徽からこの地に送られ、牧民に扶養されたと聞いている。同じ頃に安徽省から来た孤児たちは今、東スニトにまだ約70人が健在である、という。彼女はまず「本当のことを言っているの



写真3 大手企業大唐鼎旺石炭開発会社



写真4 大唐鼎旺の子会社マンライ鉱業

か」と確認したうえで次のように述べる。

ときどき上位の行政機関の人が牧畜、環境そして地下資源開発に関する実情把握のためと称して、調査に来ているが、調査先の牧民の家が事前に、しかも大抵は裕福者が選定され、話の内容もあらかじめ決められている。基本原則は現地政策謳歌の言論に限られることである。マンライ石炭鉱が開鉱以来、わが一家の生活は向上するどころか、低下し続けている。この周辺の牧人が環境汚染、犬とビニールの「三害」に遭わせられ、窮乏の一途をたどっている。石炭開発の汚染で、家畜が度重なる被害を受けてきた。2011年だけでも、わが家の子ヒツジが190頭、母ヒツジが60余頭も死んだ。水源が汚染された水を飲んで肺病にかかったことが原因である。現在では、治療の方法は未だ見つかっていないと獣医師が診断した。だが、石炭会社は賠償を拒否している。肺病で死んだヒツジは急速に増えてきたので、私はヒツジの死体をマンライ会社の事務室に運んでいこうと考えたこともある。去年は母ヒツジを300余頭所有していたが、多くが被害死して、今はこの春に出産した子ヒツジと合わせて200頭近くが生き残った。去年の春には、出産可能な母ヒツジがほとんど全部死亡し、子ヒツジが1頭も生まれなかった。家畜による収入はない。ヒツジのほかにも大型の家畜等は放牧が禁止され、いまや一切飼っていない。

また、どこからの人間か知らないが、水と土壌の汚染の調査に数回も来ている。彼らは高地だけをサンプリングする。高地は水の流れが少ないので、汚染も比較的軽い。実際には、環境汚染による家畜の被害がきわめて大きい。さらに、水質の調査結果は如何なるものなのか私たちには知らない。私たちは機井を使用して、地下水位50メートル以下の地下水を汲みあげている。最初の水が普通に無味無臭であったのは今や異様に臭う⁸⁾。

ヒツジがマンライ会社の職員が飼っている犬に襲われる被害も数々起っている。1、2頭の被害は常にあり、去年、1回に7頭も襲われたことがある。犬は石炭会社の職員が飼養しているものの、管理せず野放しにしている。弁償要求には一切応じてくれない(写真5)。犬によるヒツジの被害について旗の警察にも相談したが、何の効果もなかった。

3つ目の被害はビニールによるものである。買い物用のビニール袋と生産用の大きなビニールの薄い膜である。石炭会社のごみ場から舞い上がる大量のビニールが牧野に飛び込み、ヒツジがそれを食べてしまう。この被害が特に草の生えない冬と春に多い。ビニールは石炭会社職員の日常のごみから出たものもあれば、工場と建築工事に使った生産用のものもある。死んだヒツジを解剖してみると、胃と腸のなかにビニールがたくさん詰まっていた。

草原のあちこちを無数のビニールが飛び交う光景は筆者が2013年10月の調査でも目にした(写真6)。これは主として道路工事で残したものである。敷設の工事が終わった舗装道路表面のアスファルトに日が直接あたると割れ目が入る。これを防ぎ、割れ目の度合いを軽減するために、ビニールの薄い膜が十数キロも敷かれている。しかし、道路が乾いたあともビニールは全然後始末されることなく、草原を飛び舞う。

サイハントヤーは語り続ける。

ここの牧場は様々な汚染で甚だしく汚されている。我が家には牧場が8,792畝(1畝約0.067ヘクタール—筆者)ある。その半分を占める北の部分はすでに牧草が生えなくなっ



写真5 石炭会社の犬に噛まれたサイハントヤー家のヤギ。後脚を支えられても直立できない。



写真6 草原を飛び交うビニールに取り囲まれる羊

た。石炭掘削で排出された廃棄物に水源と土壌が汚染されたからである。今年は石炭の採掘現場と保管場所との間に輸送ベルトが整備され、目に見える汚れがある程度軽減しているものの、依然として深刻である。去年までは、採掘された石炭は何らの保護措置がいきさい講じられずに露天に山積みされ、石炭の粒子と煤が、ことに冬と春には草原に大量に飛びまわり、枯れ草と地面が一面に黒く染まる。家畜の鼻も足も真っ黒になる。長期にわたる交渉の結果、今年は今までと違って石炭開発会社が8,000元の手当てを支払ってくれた。牧野の汚染は目に見えるものもあるので、誰しも野原に出るとはっきり分かる。

私たちは息子夫婦と一緒に暮らしていて、4人家族である。息子はパワーショベルカーの運転手として大唐鼎旺会社に雇われている。最初、月給5,000元の口頭約束をした。しかし、実際は違う。資源開発政策の一環として、建前上、開発会社に地元牧民の雇用が義務づけられている。石炭会社にも牧民優遇、牧民の就職問題解決の名目が必要なため、息子が臨時の仕事を与えられた。旗政府など上の部門が視察に来るときの一種の見せかけである。もっとも、パワーショベルカー運転手の月給では5,000元は安いものの、実際、これも保障されな

い。大唐鼎旺は石炭運輸のため、新道路の建設に私の牧場を15畝占用している。占用補助金は最初1畝30元の計450元であった。裁判所に訴えて交渉を重ね、1万元で合意したが、後にまた6,000元に減った。石炭会社は6,000元を払ってくれたあと、息子の2ヶ月分の給料から6,000元を差し引いた。結局、6,000元の補助金も白紙に戻されたわけである。牧場が占領され、地下資源が掘り起こされた見返りはいわゆる現地還元として年に1回300キログラムの石炭の無料提供である。

3.2 イラルトの語り：増えつつある牧人に変身した漢人

東スニト北部、国境に近いホンゴル・ソムのシンアミドラル・ガチャーのガチャー長のイラルト（1974年生まれ、男性）をインタビューした。ガチャー長のポストに就いてから今年で7年目になる。

当ガチャーは1960年に創設され、現在、137戸の453人を有し、牧場の総面積は188万畝ある。2012年の統計では、家畜の総数は24,000頭余あり、その内、大型家畜のウシ、ウマ、ラクダは1,000頭にすぎない。各戸の所有する家畜数は差が大きく、もっとも貧困な家庭は70頭のヒツジしかなく、一家3人の生活はこれだけの家畜ではとうてい維持できるものではない。裕福な牧民は約1,000頭のヒツジを所有している。家畜の多少、生活の貧富は勤勉さ次第である。

1980年代からの牧畜政策変化の流れは「念草牧経」、「草畜平衡」、「禁牧」の三つの段階に分けられる。1985年に、自治区の主席張曙光の指示を受け、自治区政府は地域経済の特色を重んじ、牧畜の発展を重視する政策「念草牧経」を公布し、ウシ、ヒツジの放牧を奨励した。ところが、1995年から「念草牧経」に草畜平衡政策がとって代わり、牧草の状況に適應するため、家畜数が制限されるようになった。2006年から禁牧が始まり、2010年から禁牧を徹底するための厳しい罰金策が実施されてきた。これは、主として内モンゴル全体が猛烈な砂嵐に見舞われたからである。東スニトは1996年から2006年にかけて、連続10年間も旱魃が続いた。当初は、禁牧の期間は5年と決めた。放牧を禁じられた地域は5年後に、牧場の草ばえが回復していれば牧民が帰還できるとの決定であった。ところが、5年間も放牧を禁じられると牧民がとっくにはかの職についているか、禁牧の手当に頼って生計を維持するかになり、いずれにしても牧畜から遠ざかり、牧畜に戻る人は少ない。

禁牧地域に画する基準について筆者が訪ねた。禁牧は強制的ではなく、牧民たちの意志によって行われていると、ガチャーの責任者たるイラルトは答えた。

移住先は旗所在地のマンガラト町とエレーン市であり、基本的には近い町が選ばれる。移住先での住宅購入には政府から4～5万元の補助金が充てられている⁹⁾。

当ガチャーの禁牧は春夏秋の3シーズンに行われ、冬の11月から翌年の4月までは放牧できる。禁牧の期間中に、家畜は舎飼いする。飼育可能な家畜数の基準は次のとおりである。1頭のヒツジ（またはヤギ）、牛の放牧にそれぞれ60畝、300畝の牧場が必要である。ウマとラクダの飼養は制限されないが、利益が少ないため、少量にしか飼養しない。禁牧の手当では2006年には1畝に1.5元だったのが現在は4元にあげた。また、このガチャーでは北部国境付近の32万畝が完全禁牧された。禁牧政策を実施して以来、牧民のエレーン市やマンガラ

ト町への移住が推奨された。移住した牧民の就職援助と就労紛争の問題解決の相談役である専門機関が設立され、移住した牧民に支援を与えている。

この牧場の賃貸相場は1畝2円で、比較的安い。牧民は冬は地元に戻り、ほかの季節は借りた牧場で過ごす。冬の乾草が足りない場合は、飼料で補う。東スニトは草丈が低くなったため、草刈りができなく、乾草はウジユムチンなどの他所から購入する。冬には、乾草がふだん1バグ(35kg)28~30円であるが、雪害時には38円に値上がる。ここは毎年の冬に雪が降る。

ガチャーには36戸、119人の漢人が居住している。彼らは1950~60年代に、河北省蔚県から来た移民と後裔たちであり、ガチャー全戸数の約4分の1を占めている。モンゴル地域に来て長い時期を経て、この土地を離れることなくずっとここで暮らしているとはいえ、彼らの生活習慣にはモンゴル人とまったく異なるものも多く見られる。文化というものは不思議だと常に感じた。異質文化間の相違が所どころに見いだされる。例えば、家の中で使う食卓、椅子、主食の種類などにもみられる。モンゴル人はヤバガン卓(yabagan shirege)にソファーを使うが、漢人は高い食卓に椅子を用いる。麺類のなかではモンゴル人はうどんをよく食べるが、彼らはマントウ(饅頭)を好み、ミソに生のネギをつけて食べるのもよく見られる。これらの漢人は来た当初は牧場を借りて放牧していたが、現在、彼らみんな自分の牧場を所有して裕福に暮らしている。一番裕福な家庭は1,000頭以上のヒツジと100頭余のウシを放牧している。彼らはモンゴル人との通婚もするが、民族内の婚姻がはるかに多く、かつ故郷の河北で結婚相手を求めるのが一般的である。結婚して皆ここに定住する。牧畜を営み、漢語交じりで訛りが顕著であるが、モンゴル語も日常的には話せる。一見、モンゴル人と変わらぬようにも見える。しかし、漢人同士では中国語を使い、子供もみな中国語の学校に通学し、中国式の姓も変わることがない。どうしてもどこかで違和感が感じられる。

一人っ子政策はモンゴル人にも適用されていたのが2年前から緩やかになり、3人までの出産が許されるようになった。昔は2人の子どもの間にならず3年の間隔を置いたのが今は変わって、間隔年数の制限が廃止された。だが、規制が緩和されたあとも、みんながなぜか産もうとはしなくなった。漢人は2人までの出産が許される。

3.3 チョグジャラガルら：厳しい制約のなかでの牧畜

大唐鼎旺褐煤深加工産業園から北東へ約8キロのところ牧民チョグジャラガル(37歳)の牧場がある。夫婦と1歳6ヶ月になる長男の3人家族で、ゲルが一つある(写真7)。ちょうどヒツジの毛を刈り取っているところを私たちが訪ねた。チョグジャラガルと妻のほかに、7人を雇って作業に当たっている。ここはバヤンマンライ・ガチャーであるが、彼の故郷は同ダルハンウーラ・ソムのバヤンタラ・ガチャーであり、ここより南40キロ離れたところにある。彼はつぎのように述べる。

ここは知り合いの牧場で、1畝3元の値段で8,000畝を借りている。3年間の賃貸を契約した。1980年代初期に、生産承包という請負う制度を実施し、牧場を牧民の各戸に分け与えた。分譲の基準は当時の人口である。父の一家は17,000畝を与えられた。東スニト全体は一律に同じであって、当てられた牧場の面積は2026年まで変わらないが、結婚して各自の家庭を作っていく兄弟姉妹が親の牧場を分割する以外に方法はない。分割相続によって、各家庭



写真7 チョグジャラガルの移動先の夏営地に組み立てたゲル。周辺の草ばえは良いとは言えない。

の牧場は次第に減少していく。私は3,000畝の牧場を父から分けてもらったが、この広さでは決して放牧できるものではない。牧場不足の問題はますますエスカレートしていくに違いない。解決法としては、町に移住した人や放牧能力を失った人の牧場を借りるのみである。だが、牧場の賃借には大きな費用を使わなければならない。賃借代金のほかに、家畜の飲用水のために、井戸を掘るか遠くから水を運ぶ。他所の井戸使用は有料である。いずれも相当な金額の支出となる。そのうえ、他家の鉄条網を通るのに多くの不便と困難が生じる。

政府は牧場に微々たる手当てを支払っている。牧場を普通の牧場と放牧が完全に禁じられる禁牧の牧場との2種類に分けている。普通の牧場は草畜平衡の政策を順守し1畝1.71元を、禁牧の牧場は1畝4.00元の手当てを支給される。禁牧とされた地域では5年間放牧が禁じられる。地域によって禁牧のパターンにも幾種類がある。私が所有する3,000畝の30%は生態還元に属すと劃され、完全禁牧となった。残りの2,100畝で放牧できる家畜の数も制限される。300畝に1頭のウシかラクダ、60畝に1頭のヒツジ、180畝に1頭のヤギ、との基準が定められている。制限数超過の家畜の罰金は去年までは1頭のヒツジに10元であったが、今年は30元だと聞いた。大型家畜のウシ、ウマ、ラクダはヒツジの5倍に準じて罰せられる。6月末に子畜も含めた家畜数を統計して、秋に罰金を収められる。私は600頭余のヒツジ、20数匹のウマ、7頭のウシを放牧している。去年の年間総収入は10万円で、生産コストを除いて、純収入は約5万円前後である。

東スニトの南部ではヤギの飼育が完全に禁じられ、ヒツジにも制限が厳しく強いられている。1世帯に50~100頭のヒツジの飼育が認められる。北部ではヒツジとヤギの比率が決められ、10頭のヒツジに1頭のヤギという具合である。ヤギが草原を破壊すると決めつけられ、飼養が特別に規制されている。

夏と秋をここで過ごし、冬には故郷に戻る。ここ数年間、牧場賃借のため、スニトの東西南北をたえず転々としている。今年は春の子ヒツジの出産期が終わる4月末頃にここへ移動する予定だったが、砂風が激しかったため、2ヶ月も遅れて、1週間まえに移ってきた。砂風が強烈になると、家畜の世話に余計に手間がかかり、人手の需要が多くなる。猛烈な風と

少雨のため、草の生長が遅く、家畜が弱まっている。気候が異常になり、ときどき寒雨が急激に降る。ヒツジが寒さに耐えなく死んでしまうのを恐れて、羊毛刈りは遅れ、やっと今日から始まった。

近年、早魃が連続している。昔は手掘り井戸を使っていた。2～3メートル掘れば水が出たが、いまや地下水位が下がり汲み上げられなくなっている。機井を掘って、120メートルの深さに達してようやく水が出るが、汲み上げられた地下水を家畜が飲まないこともある。塩分が多く含まれているだろうか、何しろ、ヒツジは飲まない。ラクダは塩が好きだからしょっぱい水でも飲むが、下痢してしまう。

早魃がもたらすもう一つの被害はシベール¹⁰⁾の増加である。ヒツジがシベールに刺され、皮に穴が開く。体内ないし胃腸にまで刺すことも多い。早魃の年に、家畜がシベールを食べて、のどが刺され腫れて死ぬ。シベールは無数の小さい針に包まれ、針は根幹部を斜めにできているので、家畜が刺されると外部から抜けない。すなわち、シベールに刺されたヒツジには手を施すことができない。ヒツジの出荷時期の秋には、ヒツジの大量屠殺が牧民自身ではなく、卸売会社の集結地「冷库」で行われる。冷库では生きヒツジだけを買い取る。3本以上のシベールに刺されると、30～90元を引かれ、場合によっては、買取を拒否されることもある。近年、気象の異変によって早魃が多発し、シベールの被害も増える一方である。

私たちはまたダルハンウーラ・ソムのパヤンマンライ・ガチャーの牧民ゲレルバートル（42歳、現在は夫婦2人の家族）の家を訪れた。ここはチョグジャラガルの家から東南へおよそ4～5キロ離れた所であり、天幕と固定家屋が各一つ立っている（写真8）。ゲレルバートルは次のように語る。

1996年にこの牧場を所持して以来、十数年になるが、井戸はまだない。生活生産用の水はすべて父の牧場から毎日3～4回、毎回2トントラックで運ぶ。父の牧場は17里（1里＝0.5キロ）離れたモガインホープルにある。むかしは古川があったが、今は河川が完全に涸れている。機井を掘るには十数万元が必要であり、政府の補助金が約5万元出る。問題は費



写真8 移動式天幕と固定家屋が相並ぶ。中国語の普及のために、政府の提供で衛星放送を受信する設備が戸々に整備されている。

用ではなく、地下水がない。いくら掘っても水が出ないため、今まで自分の井戸がない。17頭の牛と230頭のヒツジを飼養している。牧場は4,000畝ある。ここ数年、年間総収入はだいたい7万円に達しているが、物価が高騰し、飼料、冬の乾草の購入、家畜の病気などで支出がずいぶん高額になり、純収入は僅かである。ゲルはあるが、移動は完全になくなった。移動すると、他家の牧場を通ることとなり、非常に不便であり、もう移動しなくなった。

もう一つ困っていることは家畜の病気である。過去2年間、家畜がいろいろな病気にかかった。特に去年は一夜で20余頭の子ヒツジが病死した。効果的な治療法がなく、獣医師はワクチンの接種を勧めるのみであった。ワクチンはもちろん接種しているが、ほとんど効果がない。家畜の疫病流行のときは政府の援助やかかわる制度の整備が絶対不可欠はずだが、そのような支援は非常に欠けている。疫病への対策はほとんど全てが牧民の個人行為にとどまっている。薬品の販売、購入と使用にも地方政府の指示や干渉が皆無に近く、テレビやラジオの広告に頼っている。経済的な大きな負担の以外に、心身ともに疲労する。新薬品は絶えずに開発され使用されているにもかかわらず効果は微少である。数回使うとすぐに効き目がなくなる。昔の安い薬のほうが却って効果があったような気がして、戸惑いを感じる。私たち牧民は過大な望みをいだかないが、個人の力で解決できない問題を政府の助を受けて、困難を乗り越えることを切に期待している。避けられるべき損失を免れることが牧民全体の願望であるに違いない。

それに、ここはマンライ鉱業に近い。たった4キロのすぐ隣で何の保護措置もないままに石炭を掘っている。その被害は大きい。とくに風の猛烈な季節には、石炭の小粒が強風に巻き込まれながら飛んでくる。朝の風の弱いとき、空中に雲のような雲団が見えるが、これは雲ではなく、マンライ炭鉱の排出物である。近くのサイハントヤー家も大きな被害を受け、2011年に190余頭のヒツジと大型家畜60頭が汚染によって異常死した。

私はまたダライ・ソムのバヤンエルデニ・ガチャーの牧民スチンバト（44歳）に聞き取りをした。ここもゲルと固定家屋の両方をもつ。インタビュー内容の一部は次に記しておく。

うちは母、妻と子女2人の5人家族である。中学2年生の長女と小学5年生の長男は通学のために旗政府所在地のマンガラト町に住んでいる。マンガラトのほかに学校が一切設けられていない。学生ふたりのために、マンガラトにマンションを借りており、高齢の母が面倒見で住み慣れない町に常住しなければならない。町での暮らしは各種の出費も高い。

ヒツジは1千頭近く、ウシは58頭ある。ヒツジ飼いを一人雇っている。自己所有の牧場は1万9千畝であり、規定に従うと、飼養できるヒツジの数は312頭にすぎない。しかし、物価が高騰するなかで、規定制限数の家畜では生活が困窮してしまい、生計の維持さえできない。

昔に比べると、今は発展した。むかしは電話もなかったが、現在は携帯電話が普及し、テレビも見られ、全国の情報が入ってくる。医療保険の制度も実施され、とても良い。

しかしながら、実際、罰金政策は筋に合わない話だ。私たち牧民はどのように放牧すべきかをよく知っており、牧場保護の知識も豊かである。家畜が牧場に大きな負担をかけないように心がけている。牧場保護のためでもあるが、夏には、私も牧場を借りて放牧し、冬には地元に戻る。いまのような政策は不合理な部分がある。

地方政府が「少量の家畜から高い利益を得る。」というスローガンを掲げているが、実現できるはずがない。これでは、牧民の生活は一途に困窮の道をたどっていくのが必然であ

る。「家畜の数が増えてこそ高い利益が得られる。」と私は考えている。ところが、所有している牧場が足りなく、賃借するほかに方法はない。ここは1畝3円で借りている牧場であり、1万畝ある。

自己称賛のようであるが、わが家はこの地域で一番裕福な者のひとつである。ヒツジの売価が上がリ、旱魃や雪害などの被害が少なかった去年の年間総収入は40万円に達した。それでも、生活は厳しい。この厳しさはただ経済収入だけを指しているのではなく、むしろ、主として政策上の多様な制限がもたらした損失である。なお、当然、収入のなかから牧場の賃料、冬の飼料と乾草などの購入費用も支出される。今、放牧しているウシは在来種であり、改良品種ではない。在来種は体が小さいものの、肉がおいしく、栄養のバランスも良い。改良品種のウシを飼ったこともあったが、失敗に終わった。この地方ではやはり在来種が一番適しており、改良品種はダメだということは度重なって証明されてきた。改良品種のウシもヒツジもこの冬の厳寒に耐えられなく、尻尾が凍り落ちてしまった。

1980年代から2005年にかけて、新疆ヒツジの改良品種を推し広められ、強制的に飼養させられた(写真9)。改良品種は在来種より体が大きく、体重が5kgも多いが、この地域には適さないことが繰り返し証明された。もっとも、この冬は非常に寒く、水も冷たい。新疆ヒツジは冬になると、下痢が止まらず、死んでしまう。在来種のヒツジにはそういう被害がまったくない。政府の政策を擁護して、通遼ウマの飼育も試みたことがある。これも成功できなかった。

私たちの経験からすれば、改良品種は失策だと言わざるを得ない。どこで何が適しているかは神様がすでに決めたものであり、本来、それぞれの地域に適した家畜の品種が互いに違っている。同じ内モンゴルとはいえ、各地域の気候、風土が一様なわけではない。当然、家畜の品種も微妙に異なるはずである。この自然の規則に反して、人為的に改良品種を推し進めることには成功の可能性がほとんど考えられない。政策の案出・決定者にはだいたい牧畜の経験もなく、関係知識も欠けているだろう。家畜も人間と同様に、私たちが暑い南方で暮らすのが無理なことと同じ道理である。いわゆる家畜品種の改良うんぬんとは研究者たちに



写真9 東スニトマンダラト町にある家畜品種改良基地の一つ



写真10 草原を交錯する鉄条網

よく提唱されているが、事実上通らない。政府は興安盟のシカとオーストラリアのラクダのスニトへの導入を試みたが、いずれも失敗した。品種改良より、在来種の繁殖と市場の開発が現実的で緊迫な課題であると思う。牧民にとっては、自然災害と家畜疫病の予防、家畜の市場価格の保障が非常に大事なことである。

さらに、鉄条網（写真10）で牧場を囲い込むことも伝統的な放牧を不可能にした。家畜は野原に出るのが当たり前であり、野原でせい一杯走ってこそ成長するものである。「休牧禁牧」や「囲封転移」¹¹⁾政策は予期の良好な成果を取めたかどうかは一言で語れない。ただ、私自身の経験に基づいてかえりみると、牧場の囲い込みは牧場の回復、牧草の生長に有利ではない。家畜に限られた狭い空間で草を求めるので、どうしても同じところを繰り返し移動することを余儀なくされる。牧場の負担が大きくなり、かえって牧草の生長にマイナスになる。昔の自由な放牧が草の生長にも生態環境にもより適切である。このような認識は何も私1人だけの見解ではなく、牧民の全体が共有するものだと信じている。

4 おわりに

本稿では、東スニト地域の半世紀にわたる変化を検証してきた。文献史料と实地調査資料を併用することによって、地域社会の骨子たる環境、人口、生業を考察し、歴史の変動をとらえた。この変動のもっとも遺憾に思われるものは、半世紀前まで栄えていた遊牧文明がこの地からも消え去ったことである。

内モンゴルのほかの地域と同じように、東スニトの遊牧文明の消失は定住化の推進と密接に結びついている。人為的な破壊により、牧地の縮小と退化が急劇に進み、遊牧ができなくなった。遊牧文明の消え去る荒波にもまれている牧民サイハントヤー、ゲレルバートル、チョグジャラガルらの辛酸と苦難は当局政策のもたらした激変ぶりを物語る。

激変は周縁の影響から来たものである。周縁地域の近現代モンゴルへの関わりは大きく、かつ継続的であった。この点においては、関与の性質、程度と方法は異なるものの、梅棹調査時代と現在にある種の共通点が見受けられる。それは、弱小民族としては周辺

の動きを非常に受けやすく、ある意味で受動的な存在であることだ、と認識している。

定住と農耕の推し進めではないが、モンゴル遊牧の変革を日本側が提唱し試みた¹²⁾。ところが、晩年の梅棹はモンゴルの遊牧形態の「改善」と家畜品種の改良に批判的であった。品種改良は試験室のなかではできるとしても、変化無限の自然の現象を含むモンゴル草原ではとうてい難しい。草原は生きている。試験室のようにはいかないのである、と主張した。日本支配時代には、日本側にこのような考えを示した研究者が少数ながらもいた（善隣協会 1940年5月号：29-46）。N調査でも解明されているように、品種改良の飼養が成功した例は東スニトにはまだ見られない。地元の牧民が在来種に執着があり、事実上、在来種こそ、その自然風土に適している。これは、梅棹の予測と判断をみごとに証明している。

一方、時代と周囲はいかに変わろうと、モンゴル遊牧文明の特徴が牧民の日常生活に残影として保持されていることも見逃したくない。これは牧民たちの一生懸命に伝統文化を守る努力と堅持に依拠するところが大きいと確信している。東スニトも移動遊牧から定牧・半移動牧畜へと変化していくなかで、家畜の在来種に固執し、現政策を批判するスチンバト、古い時代の家財道具をいまも日常的に使い続け、さらに、それを後代へと継承されていきたいツツグ（写真11）らはそうした牧民である。この種の努力もまた彼らの彼らを取りまく周辺に対するせめてもの抵抗であろう。すなわち、天幕に住み、規則正しい遊牧の移動生活から固定建築の家屋も使い、一ヶ所に定住するようになって、遊牧時代の特有の伝統は生活や意識のどこかに影を残してある。しかしながら、内



写真11 ツツグ家の発酵乳桶



写真12 梅棹と半世紀もわたる親交を重ねた愛新覚羅連紘の叔父、愛新覚羅憲容氏。二人とも日本留学の経験を持つ。梅棹のモンゴル調査に大いに協力した（『蒙古』1940年5月号より）。

モンゴルの多くの地域で遊牧文明の姿が完全に消えていくなかで、これがどこまでつづけられるのだろうかと憂ってやまない。

注

- 1) 東スノトは内モンゴル自治区シリーンゴル盟に所属され、タムチン・タラ平原とグンシャングク砂丘からなる草原地帯である。
- 2) qot ail, 宿営地を共同利用する集団である。
- 3) 日本側の政策と措置は当時のマスコミに多く報道された。たとえば、「従来蒙旗地帯家畜が冬季間悪劣にして栄養分に乏しい枯草を主飼料とするため、栄養体位共に低下し加わるに伝染病、狼害、雪害等により毎年相当の被害を受けている状況に鑑み、……、家畜の減耗を防ぐ見地から新規の試みとして、冬季用乾草の一大増収計画を樹て、奨励金制度を設けて乾草収穫貯蔵の徹底化を図ることになった。」(善隣協会発行、『蒙古』、1941年10月号)。
- 4) 『北支』1940年第8号に、「蒙疆に住む遊牧民の家畜飼育頭数は馬三十九萬頭、牛五十七萬頭、羊五百萬頭といはれてゐる。特に日本に於て年三億ポンドも消費され、その殆ど全部を外国に仰がねばならない羊毛がここで四千萬ポンドとれる。羊毛の生産地として将来を期待されるわけである。」との記事がある。
- 5) 梅棹ノート30にイフジョー盟ダラト旗を例に「蒙古人口問題」が議論された論文を写している。論文のなかで、モンゴル人の人口が減退傾向にあると判断している。
- 6) 『蒙古』1940年2月号の記事「戸籍調査の施行」に「蒙古聯合自治政府では管下各政庁及び盟公署を動員して十二月二十日午前零時を期し一戸戸口調査を実施した。」と記されている。
- 7) パイメンは小麦粉の中国語の「白麵」を指す。次のユーメンについては小長谷、堀田 2013: 67を参照されたい。
- 8) ガチャーの書記のゲルの中に大きな水桶が3つあり、飲用水を機械で浄化していた。電気式ポンプ井戸から汲み上げた水は薄赤で異臭があり、表面に油のような異物が浮かび漂っている。30分濾過してから飲用できるという。機械は裕福な家庭しか買えない。厨房用のゲルはトタン板で組み合わせたものであり、解体できるが、値段は伝統的な天幕よりずいぶん安い。
- 9) ガチャー長の彼は禁牧が強制ではないと言うが、次に地方政府の規定で定められた飼育可能な家畜数の基準を述べる。なお、2013年の時点では、マンガラト町の住宅相場は2300元/平方メートルである。
- 10) shibegeはモンゴル高原に生える植物ヒルガナ(hilgana)の実である。シベーは雨にぬれると落ちる。年に1回だけ実るので、1回落ちると来年の夏までは再び実ることはない。しかし、早魃ではシベーが堅くなり、先が針ようになる。早魃が深刻になればなるほどシベーが尖る。
- 11) 草原を鉄条網で囲い込み、その中に居住していた牧民は他の地域に移転させる。放牧していた家畜の多くは売却され、牧民もほとんどが近隣の町へ移住する。「生態移民」と呼ばれる強制移住である。
- 12) 当時の日本側では、例えば「コルデル種を移入、増殖すれば、在来種に比較して四倍の羊毛を採取することが出来、羊毛の質も在来種の粗剛で悪劣なのに較べて、遙かに優良である。」というのが一般的な見解であった(善隣協会『蒙古』、1940年月1号)。

参考文献

(日本語)

藍野裕之

2011 『梅棹忠夫 未知への限りない情熱』, 山と溪谷社, 東京。

今西錦司

1948 『遊牧論そのほか』, 秋田屋, 大阪。

梅棹忠夫

1967 『文明の生態史観』, 中央公論社, 東京。

1990 『梅棹忠夫著作集』第2巻 (モンゴル研究), 中央公論社, 東京。

小長谷有紀

2003 「生まれ変わる遊牧論—人と自然の新たな関係をもとめて」『科学』73 (5): 520-524。

2011 『梅棹忠夫のことば』, 河出書房新社, 東京。

小長谷有紀 (責任編集), 特別展「ウメサオタダオ展」実行委員会編集

2011 『梅棹忠夫—知的先覚者の軌跡』, 千里文化財団, 大阪。

小長谷有紀, 堀田あゆみ編著

2013 『梅棹忠夫のモンゴル調査スケッチ原画集』, 国立民族学博物館, 大阪。

司馬遼太郎

1995 『草原の記』, 新潮社, 東京。

善隣協会

1940-1944 『蒙古』, 善隣協会, 張家口。

北京・華北交通株式会社資業局資料課

1939-1943 『北支』, 華北交通株式会社資業局資料課, 北京。

(モンゴル語)

Sudba

2006 (1988) Sūnid jegūn qušiyun-u teūke-yin tuqai tobči temdeglel (『東スニトの歴史』付録), Sūnid jegūn qušiyun-u teūke temdeglel-ūn alban ger, sūnid.

(中国語)

内蒙古自治区第六次全国人口普查領導小組弁公室・内蒙古自治区統計局編

2012 『内蒙古自治区2010年人口普查資料1』, 中国統計出版社, 呼和浩特。

蘇尼特左旗地方志編纂委員會編

2004 『蘇尼特左旗志』, 內蒙古文化出版社, 海拉爾。